舞蝶物語

春蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
舞蝶物語

【Ｎコード】
Ｎ０９４８Ｂ

【作者名】
春蘭

【あらすじ】
誘う蜘蛛、魅了される蝶。絡み合う糸は、妖しく光る。歪んだ愛のかたち。駆け引きという遊戯。待ち受ける運命は――

春来夢（前書き）

『舞蝶物語』は連載となってますが、ひとつの話が四つに区切られている感じになってます。起承転結ですね。話自体は暗めですが、最後はハッピーエンドに持ってくつもりなので、よろしくお願いします。

春来夢

触れない、触れさせない

『春来夢』

キスをする訳でもなく、抱き合う訳でもなく、ただ隣にいるだけ。愛しあっている様には思えない。
いつからこんな関係になったのかも、もう忘れた。寂しかった？
甘えたかった？　誰でも、よかったの？

「……ねぇ。」

彼の裾を軽く引っ張った。

「何？」

こちらを見向きもしないで、淡々と答える。

「……何でもない。」

満たされてる筈ない。だからといって、自分から誘うなんて当然できない。

私の気持ちを知って、わざと手を出さないのか、気付かない程、鈍いのか。残酷なまでに、優しく冷たい人。
寄りかかる事もできなくて、黙って側にいる。居心地が悪いなんて思ってないけど、幸せなんて、もっと思えない。

1ページ、彼は本をめくった。彼の視線は今、そこに集中していて、私の存在なんて空気の様なもの。

誘ったのはどっち？魅いられたのは誰？

彼の頬を両手で挟み、無理矢理こっちを向かせた。

「……どうしたの？」

目を細め妖艶に微笑む貴方。

「……歪んでるわ。」

「褒め言葉だね。」

私が息がかかる程顔を近付けても、彼は笑ってるだけで、動かない。

（本当に、何もしないのね）

「……私は、あんたに堕ちたりしない。」

そう言って、手を離した。

「それは魅力的だね。」

嗚呼、憎い。でも、それ以上に愛しい。抱きつきたくて、突き放したい。側にいたくて、逃げ出したい。

心の矛盾、歪んでるのは、私のほうかもしれない。

誘う蜘蛛、なびく蝶。ヒラリ、ヒラリと揺らめく。甘い罠、近付かなければ、ひっかからない。それでも蝶は、蜘蛛の周りをくるくる回る。待つだけの蜘蛛。蝶は飛び続ける。罠と気付いて、その後を知ってるから。

蜘蛛は誘う。蝶はなびく。それでも互いは触れない。蜘蛛の巣になんか、堕ちない。

春来夢（後書き）

読んで頂き、誠にありがとうございます。次回は男の視点で話を進めていきます。

恋蜜夢

拒まない、求めない

『恋蜜夢』

「昨日、見てたでしょう？」

冷めた口調で、淡々と言う彼女。言い方からして、弁解するつもりはないらしい。

「へぇ、僕がいたの気付いてたんだ。」

試す様な答え。いぶかしげに睨まれた。

「……何も言わないのね。」

「何か言って欲しいかい？」

「嫌な人。」

「それ程でも。」

皮肉を言いあう事は、日常茶飯事。いちいち傷付くなんて有り得ないだろう。

彼女は昨日、男といた。しかも、僕の友人。不思議と、いや、不思議でもないが嫉妬心なんて沸かなかった。我ながら、冷たい人間だと思う。

その場面を見つけたのは偶然。偶然とは怖いもので、どうして同じ時間、同じ場所にいるのだろう。ほとんど奇跡に近い。

「相談……、してたの。」

不意に、彼女が呟いた。

「どんな?」

「別に、たいした事じゃない」

「ふーん」

それ以上は、追求しない。話してくれるなら、聞くけど、話すつもりがないなら、無理に求めようとしない。僕はわりと、不干渉主義者だから。

「彼、優しく聞いてくれたわ。」

「それは良かったね。」

「……ええ。本当に嬉しかった。」

「彼のほうが良くなった？」

そう言った瞬間、彼女は目を見開いて此方に振り向いた。

「冗談でしょう？」

「さぁ？　どうかな。」

すました顔で言えば、ますます彼女の表情が曇ってく。

「別れたいの？」

「君が別れたいなら。」

「貴方自身は？」

「別に。」

微笑みながらも、突き放すように答えると、彼女はそれきり何も言わなくなった。

前に、彼女を本気で愛してるかと聞かれた。僕は、間も空けず『当然』と答えた。だって、好きでもない奴と付き合うわけないだろう？

他にも優しくしろとか、冷たすぎるとか、色々言われたけど、こうみえて僕は、彼女の事をかなり愛してる。冷たくするのも、求めさせようとするのも、僕にとっては立派な愛情表現。少し歪んだ、愛情表現。

だから昨日、嫉妬心は沸かなかったけど、独占欲は渦巻いた。

「……本当に、優しかった。」

独り言の様に、彼女は呟く。

蝶は蜘蛛を離れ、花へと向かう。蜜の甘さを知ってしまったから。優しい花びらに包まれる、なんて幸せな事でしょう。甘い蜜を吸うこと、甘美な罪。きっと罰なんてない。フワリ、花が揺れて、蝶は蜘蛛の巣を離れる。

置き去りの蜘蛛。逃げた蝶。それでも蜘蛛は、見つめるだけ。呼び止める事さえ、できないんだ。

恋蜜夢（後書き）

読者様、ここまで読んで頂き、ありがとうございます。次回は少し展開が変わります。お楽しみにして下さい。

甘罠夢

捕まえない、逃がさない

『甘罠夢』

――それはあまりに衝撃的で、私を容易に狂わせる――

私達はまるで、遊戯をしているようだ。

惚れたら負け、すがったら負け、追い掛けたら負け、手を出したら、……負け。そして、それをさせたら勝ち。なんて滑稽な勝負。

だけど、私達はそのくだらない遊戯に魅了され、本気になっている。これで恋人などというのだから、笑ってしまう。

恋心なんて、きっと抱いてない。少女のような純粋さなんて、いつの間にか失った。なのに、離れられない。きっと彼に依存してしまったんだ、私は。

（もう止めて、違う男にいっちゃおうかな。……優しい人のところに。）

前に貴方は、こう言った。
『彼のほうが良くなった？』
それは半分当たっていた。だけどね、今更この遊戯を降りる訳にはいかない。
「……ねぇ。」
目もあわせず、話しかける。
「なんだい？」
彼も、私を見ずに答えた。
「愛してる？」
――なんて愚かな
「誰が？」
「あんたが。」
――なんて哀れな
「誰を？」
「……私を。」

――それでも、止まらない

「当たり前だろう？」

彼は即答する。戸惑いなく言うから、少しだけ面食らった。

「……ふーん。」

それさえも、計算の内？　表情変えずに愛の言葉、って程でもないけど、簡単に言ってしまうのね。

彼の肩に手を伸ばす。一瞬間を置いて、深呼吸。そして、優しく儚げに、後ろから彼を抱き締めた。

「……どうしたんだい、珍しい。」

表情は見えないけど、声色からして、機嫌良さそうだ。

――嬉しいの？

思いこみかもしれないけど。

「……私は、あんたに恋心を抱いた事はない。でも、今更離れられない。あんたの存在に依存してしまったから」

一呼吸でそう言うと、彼は振り返り、私の目を見た。

視線が、絡み合う。

「降参？」

しばらくして、彼が問いかけた。

「馬鹿言わないで。私はあんたと賭事なんかした覚えないわ。」
強く言いきると、彼はフッ、と妖しい笑みをこぼした。
「やっぱいいね、君。言っておくけど、僕は君に惚れてるよ？」
彼の右手が、頬に触れ
「――よく言うわ。」
左手が、首筋を這う。
「酷いな、本当のことなのに。」
すれすれのところで言い捨て、私の返事を聞く前に唇を重ねた。
今までの想いを味わう様に、深くて長いキスをした。こみあげる感情は、一体なに？
――あぁ、そうか。
浸る為に、私は瞳をゆっくりと伏せる。
私は彼を、『愛してる』のね

雫がこぼれる。周りは暗闇。光を頼りに、蝶はヒラヒラと舞う。
いつしか、それさえも罠と気付いても、蝶は飛び続ける。濡れた蜘

蛛、艶やかに光り、蝶を誘う。掬えない雫、濡れた代償、手に入れるもの。

輝く蜘蛛の巣、魅いられた蝶は、罠と知りながら自ら近寄る。嗚呼、堕ちてゆく――。

甘罠夢（後書き）

第3話終了です。次回、最終回となります。まだ執筆中ですが、幸せな結末になりますので、読んで頂けると嬉しいです。

愛花夢

愛してる、愛してる

『愛花夢』

暗い部屋、僅かな月光だけが僕等を照らす。彼女の裸体に残る無数の朱い痕は、何があったかを物語っていた。

「疲れた……。」

「でも、よかっただろう？」

「馬鹿。」

呆れた様にため息をつきながらも、頬は赤く染まっている。愛しい、と思うのは、惚れた女だから？

「眠くなっちゃった。」

そう言って、彼女は枕に顔を埋める。

「もう寝ちゃうの？　まだ僕は満足してないんだけど。」

軽い調子で言えば、案の定嫌な顔された。……少し傷付くなぁ。

「冗談じゃない。一体何回やる気？私はもう無理だからね。」

きつく言い放ち、うつ伏せに彼女は布団にくるまった。本気で寝るらしい。

――……それは困るな、つまらないじゃないか。

彼女の肩を掴み、こちらに向かせた。

「何……」

虚ろな目で、見上げてくる。視線が合うだけで、ゾクゾクと躯がうずく。

彼女を引き寄せ

「満足してないって、言ったろ？」

耳元で、息を吹きかける様に囁いた。

「ちょっと！　本当にもう眠いの！！」

首もとに顔を埋めれば、焦った様に彼女は躯をよじらせる。逃がさない為に、なだらかな腰を掴んだ。

「だったら、目を覚まさせてあげるよ。」

そう言って、僕は彼女の首筋に朱い華を咲かせる。それを何度も繰り返した。

「…っ、や……」

だんだんと息が上がってきた彼女。頬を赤くし、目をうるわす姿に、興奮と快感を感じる。

愛しくて、愛しくて、ズタズタにしてしまいたい。

「あぁもう、痛いって！　なんで歯を立てるのよ！？」

「愛故に。」

ニヤリ、と口もとだけで笑う。彼女は、顔を更に赤くさせ、目を背けた。

「……見えるところに、噛み痕つけるし。」

「それも、愛故に。」

微笑んで答えると、彼女はため息をつきながら、どんな愛よ、と呟いた。

君は僕の歪みの深さを、知らない。僕は君を愛しすぎて、いつも優しくしたいし、ボロボロに泣かせたいとも思う。

今、僕の下で君が嬌声をあげているのも、僕がそうさせてるという事に快感を覚える。求めても、求めても、足りない。君が欲しくて仕方ないんだ。

「腰、痛い……。」

恨めしそうに、睨まれた。

「ごめん、ごめん。歯止めきかなくて。」

たいして悪びれもせず、僕は機嫌良く答える。

結局、あの後も幾度となく彼女と繋がった。まだ僕はできたけど、さすがに可哀想なので止めておいた。それに、これからは毎日でもできるんだから（やらせてくれたら、の問題だけど）。

「今までキスのひとつもしなかったくせに、なんでいきなりこんな激しいのよ……。」

不意に呟いた彼女。僕は表情を変えずに淡々と言った。

「それは、君がなかなか折れなかったからさ。」

「だからって、普通男からするものでしょう？　私はてっきり、あんたに性欲なんか無いのかと思ってたわ。」

「はは、まさか。僕だってあるよ。ただ理性があっただけで、それも君が誘ってきたから必要なくなり、今まで溜めてた本能が爆発したんだよ。」

説明口調で話すと、呆れた様に何それ、と言われた。

つける朱い印。絡ませる舌。それは醜い独占欲。愚かな自己陶酔。様々な、証。

ふと隣を横目で見ると、彼女はすでに寝息を立てていた。無意識に柔らかな笑みがこぼれる。

――ねぇ、こんな愛情、全然綺麗なんかじゃなくて、酷く歪んだものだけど、それでも僕は僕なりに君を精一杯

「愛してる」

手の甲に口づけをひとつ落とした。

糸に絡まった蝶。近付く蜘蛛は、嬉しそう。誘って、誘って、誘って、ひたすら待ち続けて、やっと手にいれた。蝶は動かず、蜘蛛がくるのを黙ってみつめる。ユラリ、今蜘蛛と蝶が、初めて触れあう。

待ちわびたもの。蜘蛛は喜びに舞い、蝶を愛でることだろう。きっと、永遠に――――

END

愛花夢（後書き）

はい、とうとう終わりました。ここまで読んで頂いた方、本当にありがとうございます。連載と言っても、四話完結と短くなりましたが、自分なりにまとめられたと思います。感想をもらえると嬉しいです。

香誘夢（前書き）

【外章―香誘夢―】は、『春来夢』と『恋蜜夢』の間の番外編で、彼女が彼の友人に相談する場面となっております。

香誘夢

望んで、願って

『外章―香誘夢―』

落ち着いたカフェ。ひとり熱いコーヒーを飲む。砂糖二つにミルクたっぷり。なかなか丁度いい甘さだ。コーヒーといえば、彼はいつもブラックを飲んでいた。紅茶もストレートだし、甘いのが苦手らしい。

――カランカラン

入り口から来客の合図が聞こえる。チラリと視線を移すと、俺の待っていた人だった。

彼女は俺に気付くと、手を振りながら来た。

「ごめん。自分から呼んだのに、遅刻するなんて…。」

「いいよ、そんな待ってないから。」

本当はけっこう前から待っていたが、汗をかいて息切れしてる彼女を見ると、嘘が自然にでてくる。

ありがとう、そう言って彼女は椅子に腰かけた。

「…で、話って？」

今日俺は話があると言われ、彼女に呼ばれた。なんの話かなんて、簡単に想像つくものだけど。

「じ、実は彼の事で相談なんだけど……。」

ほらやっぱり。

「何かあったか？」

「何もないから、困るの。」

「はは、成るほどね。相変わらずって事か。」

「相変わらずとか言うなよ…」

キッ、と軽く睨む彼女。口を尖らせる表情は可愛いと思った。

――そんな事アイツに言ったら、俺嫌われるかな？

「悪い悪い。…じゃあ、お前はアイツの事好きなのか？」

そう聞くと、彼女は顔をしかめた。少し核心をつき過ぎたかもしれない。　彼女はひとつため息をはき、眉間に皺をよせながら言った。

「付き合い始めなんか曖昧で、今だって彼の事どう思ってるか分からない。でも、なぜか離れたくないの。」

そんなの、告白みたいなものじゃないか。どうして自分で言って、気付かないんだ。

「…別れたほうが、いいのかな。」

それは小さな声で独り言の様に思えたけど、俺を見てるって事は、きっと質問なんだろう。

「お互い両想いなんだろ？自分の気持ち隠してまで、別れる必要はないと思う。もう少し素直になってみたら、結構変わると思うし。」

「素直に……ねぇ。なんか負けたみたいで悔しいじゃない。」

ななめ下に視線を落とす彼女。悔しいなんて思ってたら、一生触れ合う事は無くなってしまうじゃないか。

「―俺は、お前が今辛いなら、別れたほうがいい。でもやっぱりそれは、悲しい事だろう？」

想いあってるのに、離れるなんて…

「アイツはただ、天邪鬼なんだよ。求められなきゃ何もしない。例えどんなに愛していても。」

――理性が感情を、制御するから

うつ向く彼女の表情は、髪が邪魔で見えない。

「優しさだけが愛じゃない。冷たくされても、アイツの側にいたいんだろ？だったらそれで充分じゃないか。いつか、立場逆転してやれ。」

強く言いきる。彼女は顔を上げ、俺を見つめる。面食らった、って感じだ。

「俺はお前が幸せなら、それでいいんだよ。」

まるで、ドラマみたいな台詞。自分で言ってなんだけど、すごくくさい。

「あ、ありがとう…。えっと、じゃあ私用事あるから……。」

自分で呼び出して、もう帰ってしまうのか。それに言ってる事がまるで口実のよう。言葉には、しないけど。

「ああ、じゃあな。」

別れを告げると、彼女はそそくさと帰っていった。何をあんなに慌てているのか。

不意に窓の外を見る。

――成るほど。だから慌てたのか。

外にいる男と目が合う。彼は笑みをこぼしたけれど、目が笑ってなかった。それを俺は、苦笑いで返した。

――まったく、面倒くさい事になってしまった。

「誤解されたかな……。まぁこれで嫉妬でもしたなら、変化あっていいけど。」

コーヒーの最後の一口を飲みほす。ぬるくて、おいしいとは感じなかった。

お互いで意地の張り合い。本当は深く愛しあってるというのに、遊戯に夢中になって。ひどくもどかしい。一度触れ合えば、今までが嘘の様に恋人らしくなるだろうに。

彼女が自分の気持ちに気付くのが先か、彼が我慢できなくなるのが先か。

「あんまり余裕抜かしてると、奪われるよ……？」

糸は意外と脆いから――――

甘い蜜の香りを漂わせ、美しい花びらを風に揺らす。フラフラと羽ばたく蝶。蜘蛛はそれをひたすら見つめる。行っては返って、蝶はさまよう。蜘蛛の巣を回り、花に誘われる。

魅惑の愛、甘美な愛。蝶が選ぶは、無償の愛……。

香誘夢（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。相談する場面書いてみたかったんです。本編では書く機会がありませんでしたから…。
よかったら【舞蝶物語】の感想下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0948b/

舞蝶物語

2010年10月10日11時42分発行